一日の流れの特異

印象空間による個の獲得

立体的に発展した交通網による時間と距離との関係が分断された。それに伴い人々は「移動」の間、その他に対する意識が希薄になった。それにより都市の中で人は他者と共有において「集団」という力に取りつかれ、自身ではコントロールできない状態に巻き込まれ、パーソナル、「個人」を持つことが困難となった。

公の場、交流の場とは他者との共有を前提としたプログラムを提示したことで成り立った状態に感じられる。

「公共」というプログラムを最初に提示されたことで「個」はその他、集団に引っ張られてしまう。

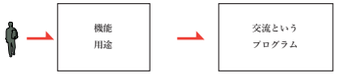
交流という単語は一言で言い表されているが、意味を還元していくと印象、行為、そして交流という段階を踏んでいく。

公共スペースという場は最初の「印象」を作り出すことによって交流という状況のきっかけを作り出し始めて生み出される関係を指しているのではないだろうか。

この設計は最初の「印象」を生むためのプロローグのための空間設計である。

武蔵野美術大学　矢舗　礼子

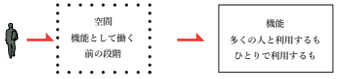
都市の中の公共の場



個の見え方

そこにいるという「一様」に括られ集団としての枠組みに囚われ個が溺れる。

純粋な「交流」という言葉には、意味を還元していくと
その状態になるまでの行程を経る前置きが存在する。
この空間はこの過程を純粋に踏んでいくものである。



個の見え方

それぞれの「場」の捉え方をもち振り幅のある
一人一人に色、個を持た状態で「公共」となす。

研究について

自身の卒業研究では神聖な空間とはどのようなものから生まれるのかを研究し、教会や礼拝堂の空間と住宅空間の類似点を抽出し、住宅空間内にいわゆる「神聖な」空間の片鱗が見えると論じた。

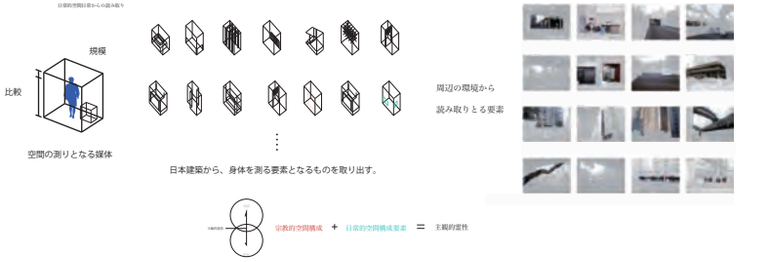
そこから研究を進めていき、本研究は「神聖さ」についての認識の変化についてとそれを誘発する空間の構成の多様性について調査・分析していく。研究に際して　絵画からの抽出空間と身近な空間体験として、日常的なものの抽出を行い、双方の関係を取り持つ新たな第３者の空間体を提示していく。
抽出空間をカテゴライズしていき　絵画からによる宗教的空間抽出はそれぞれ形態において大きく分けて解放的限定的、誘引的な空間の特徴を有している。この大枠から空間をさらにカテゴライズしていく。
等身大として日常空間は人のスケールを基準とした比較、規模、測りの媒体となる要素を有しており、日本建築特有の要素をはじめとし、構造体、周辺の環境からの読み取りといった要素を割り出していきます。
これらの特徴の値は設計の足掛かりとして利用する。宗教的空間と日常的空間から導き出された新たな第３空間体を主観的性生と呼称する。
この働きは空間と空間を比較し、次に空間と人を、そして人と人へと知覚する。この過程によってより人は自分の場をより印象強く持ち、また自身から空間やその他に対しアプローチしていく。この過程をより特徴づけた空間体となった。
宗教的空間と日常空間を当てはめるこの空間体は自分の時間を作る場を自ら見出すインタラクション空間の装置となる。
空間同士が呼応し、空間と環境が呼応し、
それぞれの人にとっての特異な場を作ることはできないでしょうか。

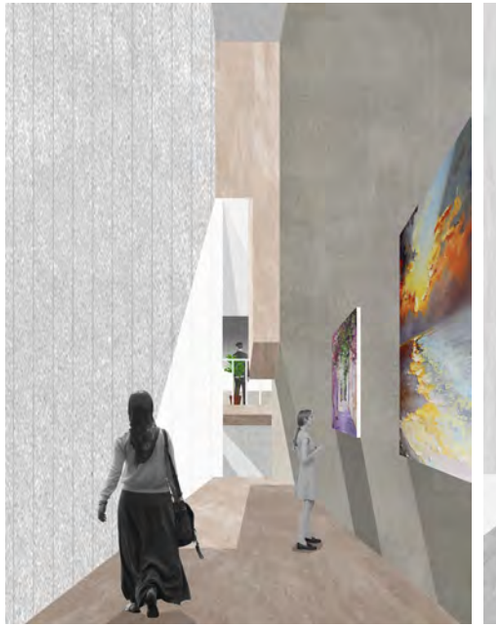
教会の空間はその場でしか感じられないのか。

住宅の中でも「それ」に似たようなものを感じる時がある。

宗教的空間からの読み取り

日常的空間からの読み取り

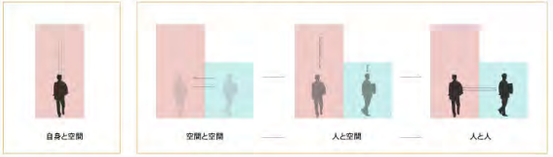


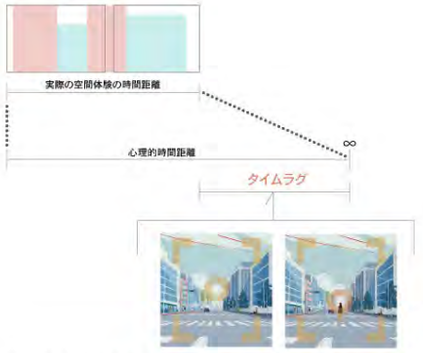


タイムラグとは

研究を通して得られた空間体は日常のなかに潜む緊迫と弛緩の相互で発生する
感覚をもち、その状態は無意識に自ら空間へと意識を強めており
自身と空間の結びつきの強化となってる。
主観的霊性の空間とは自身がいる空間を無意識に分析し自分のいる空間を知ろうと
呼応していく行為です。
空間と空間の比較から空間と人、人と人への知覚までのその無防備な状態をあえて
作り出す空間性を新たに「タイムラグ」と呼称します。
「タイムラグ」の空間によりカメラのピントが入り込んだ対象にフォーカスするように
「印象」がより誇張されていきます。
また他の空間との比較によって自身の空間からそれ以外へと
意識的広がりが生まれ、認識的な空間の獲得となります。

空間を認識する行程





認識的な空間の獲得

分析抽出された「タイムラグ」のあり方の「ボキャブラリー」によって
「印象」というきっかけよる自分と「その他」に対するアプローチの装置によって
場に心理的拡張を生み、自身の時間、「個」への回帰となるのではないでしょうか。
この空間性、ボキャブラリーを利用し設計計画へと還元していきます。

タイムラグのボキャブラリー

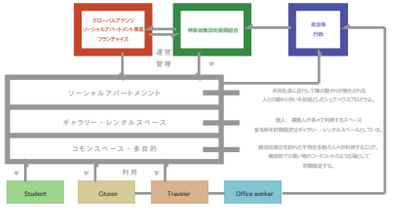
シークエンス 次の空間などへの誘引性	視線を限定化
空間形態の 規則性 エリアごとによる素材の切り替え	光源の向こう側
空間の抑揚による分析	見え隠れ
壁の切り替え	フレーミング
形態の連続性	単一マテリアルによる 背景化
上部への開き	レイヤーごとの変化
外部との比較	マテリアルの繋がり

敷地について

神楽坂は、神社やカフェ、雑貨店や本屋など大きな規模の商業施設ではない
小さい単位の店々が立ち並ぶ。
新宿という大都会にありながら、ひとつ細い路地に入ると、江戸時代の面影も今に残す街。
道も大きな通りから急に小さい路地へと入り込む、傾斜地でもある事と合間って外部から
受ける体感情報が豊富な場所である。
この場所を訪れる人も多岐に亘り、神楽坂周辺の住民をはじめとして、周囲の学校の学生、飲食を
目的としたサラリーマン、海外からの留学生、観光者。
多くの人が関わりあい、広がっていくポテンシャルを多く含む敷地である。

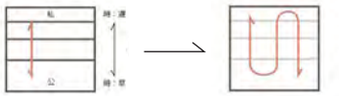
漠然と開かれた場

この場所で大きな枠組みの「開かれた場」を作る。
プログラムとして、ラウンジを用いた人との関わりを増やしていく事業
ソーシャルアパートメントプログラムをフランチャイズし、
神楽坂商店街振興組合と自治体行政との連携による運営管理を考えている。
前提のプログラムとして３つの領域をもうけた。ソーシャルアパートメント（シェアハウス）と
神楽坂やその周辺を利用している方や住民といった
不特定多数の方が利用するコモンスペース、
一括りに多目的スペースを付与する。そして個人、団体などが利用できるレンタルスペースの
領域をもうけた。これらの３つの領域はフロアレベル、層ごとに分けるのではなく
それぞれの領域の接点が増えていくように空間を関係つけていく。



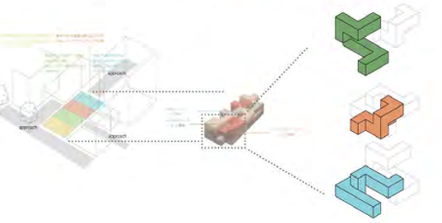
空間と動線エリア

ある広大な空間を不特定多数の人がエリアを共有することが既存の公共の場である。
この状況は「みんな」が使う場所という概念から無意識かにそこにいる
「誰かに、なにかに」行為を合わせて行っていく。
引きずられてしまう現象が生じるいわゆる「その他の中の自分」として集団に取り込まれる。
そこで、不特定多数の人々がある「区画」「エリア」で絞られた「ある一定の広さ」
の空間を点在させた場を利用すると一時的にその場を「個」の場と認識し
その上でその他への「空間、もの、コト」に対して認識の上の意識の上の
拡張を起こすのではないだろうか。
その他。集団を自身と切り離して考えられる。これはいわゆる「自分とそれ以外」となっていく。



空間的に時間的にも大きな括りの
公と私は距離の概念が付属される。

公としての最短のルートとは別に３つのエリアが
それぞれを横断するようにエリア動線の接地面積
を増やしていく空間構成をとっていく。
そうすることによって一つ一つの空間の大きさは
限定されるが多くの領域が生まれ空間を
「所有する」という意識的変化が生まれる。



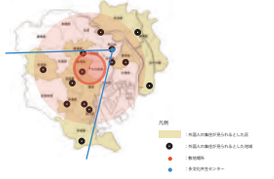
内包する３つの領域は層ごとに分けるのではなくそれぞれの領域の接点が増えていくように
それぞれの空間を横断するよう関係つけています。敷地の中にそれぞれのエリアが絡み合い
一つ一つの空間の大きさが限定され一定の空間から「その他」への意識的広がりが生まれ
自ら空間に働きかけます。

事後的に利用されるケースアプローチ

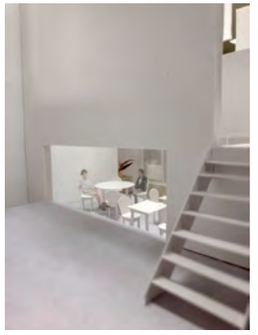
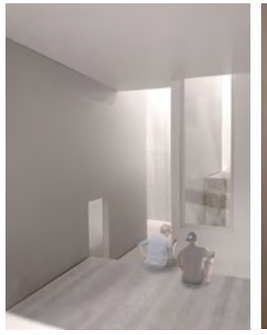
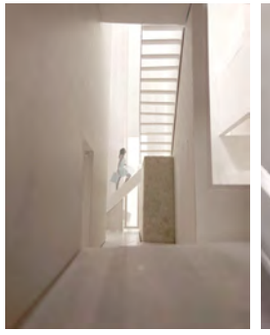
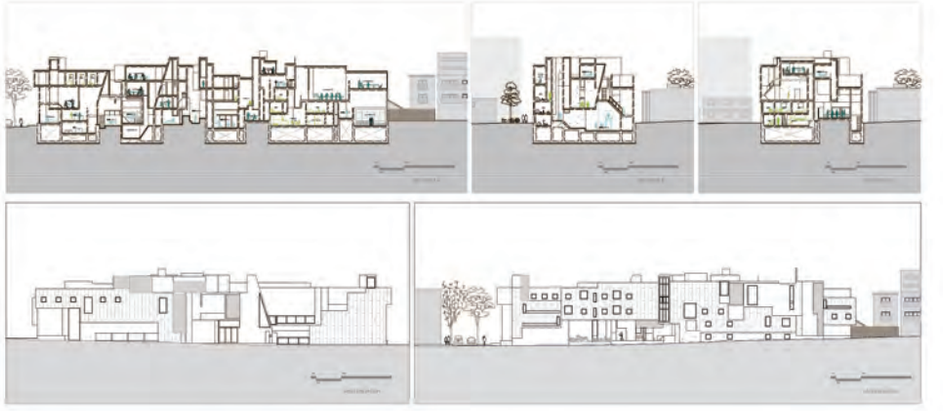
public

東京都の外国人集住は、朝鮮半島からの移住者に始まる。現在の荒川区、台東区
江東区などに、後にオールドカマーと呼ばれる朝鮮半島の出身者が増加した。
戦後は、出稼ぎを目的とした外国人が、新宿区、豊島区を中心に多く集まるようになった。

また、「多文化共生センター東京」、外国人学校、OB,OG の拠点は荒川区にある。
下町の風情が残った細い路地を進み、それらしき大きな建物を見つけたと思ったら
さらにその脇道へ入る。たどり着いたと思ったら、入り口が分からないかなり
入り組んだところにある。
この建物の「場」というのが新生し、外国人にとっての新たな拠点となる事後的影響力を
持っているのではないだろうか。



周囲の学校などの課外活動として
商店街にとってのフードコート、イートインの延長線上として
場の使われ方がそれぞれの立場で変化していく。

private

商店街振興組合のよるアプリケーションによってレンタルスペースの利用を円滑にする
個人がスペースをレンタルするという行為が自宅の部屋と「その他」という選択枝を増やしていき
スペースのポジティブな個人化、私的化を生み出す。